



123
3009

4-6-5
停
(1079)

北の界をさうき野々の古の書ともしらむ郡のかを
ける例おろくればさきをさしなすれど北の地
つきふといふ野原よく尋ねて後よきたるべき
事也又神武のおほん山の東北と日本記も
延喜式もいふ城かのすむせの坂の西北より南と
あなれに疑ひなきとあはれは必ず東北とあるにならむ
いづるもがひもあはれは必ず東北とあるにならむ
きろしあはれさうんか後の人なるよく尋ねてさ
ぶらてよ

本居宣長云此御陵今詳なるは但綏靖天皇の
御陵と申傳ふるが
綏靖天皇の御陵の事
此神武
天皇の御陵なるつき其山本村の西慈明寺村

乃南と連なる高き處に在り即ち畝火山の西
北方より属する岡上より正しく尾上といふ
地形なり北は山西北方なり北は山西北方なり
御陵の地は北は山西北方なり北は山西北方なり
天皇の御陵は北は山西北方なり北は山西北方なり
畝火山の西北方より属する岡上より正しく尾上といふ
地形なり北は山西北方なり北は山西北方なり
御陵の地は北は山西北方なり北は山西北方なり
天皇の御陵は北は山西北方なり北は山西北方なり

宮内省

圖を以て見せしむるに同國の内よりあるべき近き
處よりハ三行ハ仲見見てかんうへきたりたる
外よりそ語けるおれをき見まなぶのさ
きのかんかへハ仲見見てかんうへきたりたる
つるところを其まなぶとそおもはるる
とれハ後靖天皇の御ハかなるに今ハいふところ
よハあしと思はるるハ今それと申ハいつし
此帝の御なるハかなるに今ハいふところ
ゆれしてこの英齋といふ人ハかへて御世ハ
の天皇の御陵と始奉りて皇后皇子皇女を
これ御墓とて廣く考へて陵墓志といふもの
けりしとてハかなるに今ハいふところ
せしむるハかなるに今ハいふところ

すちれことなりむいしハかなるに今ハいふところ
ふへられしとてハかなるに今ハいふところ
ありぬらんそのハかなるに今ハいふところ
蒲生秀實云今畝帝山東北隅所呼曰御陵山墳然
而隆起也大和志以此為神八井之墳其八井之墳
隅平地未詳何處也今妄認云爾若果神八井之墳
乎其位已人臣又何傳之御陵乎今呼曰御陵
是土人口碑素而不偽凡此類可擇而采矣大非如
夫好事者以臆傳會也
但其狀不甚高莊且不象官車乃以上古大朴制未
備也廣陵記云畝帝山東北陵為一山一山一山一山
有所謂神武田名且所謂餘數而距山一山一山一山
不也武田名且所謂餘數而距山一山一山一山
此也武田名且所謂餘數而距山一山一山一山
治也武田名且所謂餘數而距山一山一山一山
封也武田名且所謂餘數而距山一山一山一山
何更營一物之情也苟夷之驚田其古墳是當時所
或神八井之類決非神武陵也神武田一當名美質左

宮内省

伊是美左々岐野訛即謂山陵也山陵与廟俗互其
言今謂神武田曰美佐々岐蓋以其嘗有廟焉相傳
旧嘗有神武祠廟在神武田之趾有國源寺焉又傳國
漂而後遷大窪村大窪寺之趾有國源寺焉又傳國
法師亦嘗自神武田旁遷于此據多武峯記有奇善
人顧泰善謂曰為朕講大衆法瑞帝東北福朕是日
輒來誦法華故貞元二年大和守藤原國光創堂
宇由比國源寺則夫其祠廟亦在浮屠氏之常然而
帝曰塔垣就其名而考疑是其在時建塔中即神武
美佐佐其下曰洞村武今守之聚也相傳其故種本
岐罪隸沒入者不齒鄉人也故其宇陵戶皆賤種本
子孫遂轉業屠者柘櫛多亦勢也

水嶋永政云此間古事傳此陵實二本居説の如し
土人云此陵時ありて鳴動を今四糸村の塚を此
天皇よ當りて本居説の如く信しか多四糸
村の塚ハ田野中よあり土人ジアテといへり先

達神武田軟といへり近世浪花人石垣を修復
せり小死塚也上古山陵よかゝる小冢ハあり今
古事記ニ在畝火山之北方白檮尾上也とあり今
此文よ隨へり祠廟ハ畝火山の東大久保村よあ
り
北浦定政云畝火山の東北と洞村といふ其村の
上にあり字丸山とよ山ノ陵志ニ神武陵ハ畝火
陵上ト云所其下ヲ洞村ト云ト東北ノ隅ヲ呼テ御
山ヲ尋スルニ知人トシ祖シト功坊丸山ヲ古ハ御
山ヲ呼シカルニ後世ノ神功社ト神功皇太后ノ社
コハ神武社ヲ後世ニ奉リト傳ハテ皇太后ノ社
社ノ祭礼ハ九月十日奉リト傳ハテ皇太后ノ社
火山の東北に葉式の東北と有る叶ひ古事記
上古の陵制も叶式の東北と有る叶ひ古事記
の畝火山此北方白檮の尾上よ葉子と有るよ
人叶へり洞村ハ二町斗東北ニ帝陵の形ナシト又

神武天皇ノ尾上ト云
 跡ニモルヤハソコハ國源寺ノ
 實ニサモアブルヤシ▲四糸村ノ東ノ田中ニモル
 字ニ山トヨブル神武陵ト云アレド是モ平地ニモル
 云ハ山ノ尾上ス
 トテ云ハ山ノ尾上ス

神武天皇ノ尾上ト云
 跡ニモルヤハソコハ國源寺ノ
 實ニサモアブルヤシ▲四糸村ノ東ノ田中ニモル
 字ニ山トヨブル神武陵ト云アレド是モ平地ニモル
 云ハ山ノ尾上ス
 トテ云ハ山ノ尾上ス

神武帝陵考

中盛彬ノ説

宮内省



宮
大
省

三
四
五
六

(六十二)

安寧陵



阿栲山

畝火山

古事記上

三島湟咋之女名勢夜陀
多良比賣其容姿麗美故
美和之大物主神見感而其
美人為大便之時化丹塗矢
白其為大便之溝流下突其
灵人之富登以音
按富登は女陰云これ
初とて記紀より多く
載て陰の字致と填た
此山陵は為体及井の処
在とて併考ふべき
也

神武帝陵考

神武御陵古史の正しく見えぬは後世定りか
つゝとて穿鑿丹精近世漸眠るゝ如し
と雖も先哲もいふ説定り盛林竊ふと云ふ
薩日隅の現存する瓊々杵尊葦原合尊南御玉
依姫等々高屋吉平に御陵圖に依り古跡想像
奉に共々山陵平陵より其平陵の必岩窟に構へ
たり且綏靖より孝元迄の皆神世の道風と云ゆ
の神武は殊に遷都追討の御行續々御謚より知
る英主なるに式とある綏靖安寧の兆域より
及はるも十一ヶ怪に思ふに何の備も無き平原
に定りきやうなり畝傍の絶頂に在りきは上
世の用意ありんば山上より御跡より然れは近

世近考の如く記記式より適されし必洞村の丸
山ありつゝ元来畝傍の一面の岩山ありし丸山
に限らず岩塊ありし壑間を證するやと思ふに
付ても和泉州仁徳陵と近年まで在り三烟の陵
戸を以て竊し思へし洞村も若くは古陵戸子孫
の所より是非すやとさへたとらるゝや又
此山即今蕪穢の様なりを考るに今の御陵方位
も史の筋脈より辛はる上より「サンサイ」シム田
塔の垣内なりと字を承ると思へし先哲考の如く此
処は彼泰善法師の時国光が新建より國原寺の
跡法華讀經の時勸鎮を奉る御靈廟の處と違
はらばありし松下氏の後定政憶中光平を以て
皆隨ひぬ又思に百舌鳥野の磐田帝殯葬の地と

して後より山陵に移されしなり此らハハハも殯殮
の地より後より丸山に移されしハハハ亦知つゝハハハ
倭武の御陵も御跡三處あり亦二皇子乃神功皇
后を禦かむとて設たまへし御跡さへ播州に現
在する仲哀陵なりと思合せしも想像なり大
凡鬼神の道祠の所を現るハハハの道理を以てし思
ひ奉るは丸山を鎮まらざる神靈を泰善の茲に
勸請せし時よりハハハ此地を鎮まらざるにハハハ
のらむハハハあるハハハ今も守衛の神在り汚穢を拔
ひ清まらざるハハハ又泰善が魂も護
奉ることよりハハハ其上御舊陵も掲然
ハハハ今もハハハ措てハハハ搜り覓らんハハハ
ハハハ此處を御本陵と稱し奉るハハハ神慮より適

ひ奉へくおしほゆ願ふ丸山あり小社を俗に
祢せり神武陵とりの地より移して九月十二日の
祭祀をこゝより行ひふ懿徳安寧近傍の例も
しかなむ後の疑惑を明あるの一助としふ事
んと竊とおもふ事

序より小孝元より神世の餘風のこぼり山陵
ふり開化より官車に象よりつくろけり池にか
なりす方なり高低方圓の中間兩傍より出る耳ふ
りの山の轅轡の象にたりなり其内和泉州百
舌島野あり仁徳御陵大和抄添上郡磐野姫御陵
此二處の池は二重より造き二重堀は此二陵に
限りて外よりなり磐野姫の御陵を今平城陵と
誤り傳へたり此堀今甚見つかよけきとし東

裏方にて聊おまかけのこけり光仁より又山
陵となりたり皆築たる山にて自然の山
にはありに洞御陵となり後元明元正聖武三
帝の又宮車象なり且此三帝の火葬なり合葬の
持統も初まき皇祖武陵の伏見桃山の御陵を正
しくは今祖武陵と稱する仁明陵ありて皇
武の時十陵を祭りたり時山科の陵を第一
とすたより小枕の草紙にありの陵といつるか
此御陵ありて鶯の陵とあり此誤なり又三笠山
野の御陵ありて鶯の陵とあり此誤なり又三笠山
絶頂あり石に鶯陵と彫あり後世の事なり天
民かえりせりといつるかたはありか因に云
今も御櫛を土中よりおぼ奉る人の皆鳥の羽を

附る神代天稚彦の條をおきへいといふやうに例
あるわけよも貴人の力堪へから低官の玉體
に近侍き奉へうら治りれ鳥をてつたさくら
勢よまよみやいと行りるくかこ志こを
てたへへを樂は鳥冠れこゝろをててさるけ
る鳥にあらうさううは身官の人玉體よ咫尺し
奉る登から治

中盛彬三つ治

大和のふけりて伊勢入宣長が著
る古事記傳とらてうかき事と
くふうと其二十の巻凡神倭伊波礼昆古天皇
御年壹佰拾歳御陵在畝火山之北方白檮尾上
也といふ傳は日本書紀を引く明年秋九月乙卯
朔丙寅葬畝傍山東北陵とあり諸陵式と畝傍山
東北陵畝傍種智宮御宇神武天皇在大和國高市
郡兆域東西一町南北二町守戸五烟と見えし
この御陵の全詳あるは但し綏靖天皇の御陵と
申傳ふべきと綏靖のいふまゝさしたるの神武天
皇の御陵あるべきそまは山本村の西慈明寺村
の南より一里ある高き所より即畝火山の

神武御陵考

大和のふけりて伊勢入宣長が著
る古事記傳とらてうかき事と
くふうと其二十の巻凡神倭伊波礼昆古天皇
御年壹佰拾歳御陵在畝火山之北方白檮尾上
也といふ傳は日本書紀を引く明年秋九月乙卯
朔丙寅葬畝傍山東北陵とあり諸陵式と畝傍山
東北陵畝傍種智宮御宇神武天皇在大和國高市
郡兆域東西一町南北二町守戸五烟と見えし
この御陵の全詳あるは但し綏靖天皇の御陵と
申傳ふべきと綏靖のいふまゝさしたるの神武天
皇の御陵あるべきそまは山本村の西慈明寺村
の南より一里ある高き所より即畝火山の

宮内省

西方に属する岡の上より正しく尾上といひつ
るべき地形也。此山西北に書紀諸陵式
御陰井上御陵と正しく此山の西ありを書紀に
南とある違ひもあはれ必し東北とあるに
堅く泥をへりし書紀の儘より擧げしつ
らん又此記より北方とあるを中根松下氏の前
王廟陵紀より此御陵の下より三百年以来壞為糞田
氏呼其田字神武田暴汚之所為可痛哭也云々と
いへり大和志より在四糸村といへりこれより
北四糸村一町はかき東に下畝火山より五六町
東北の方にありて田間に僅に三四尺許の高さ
ありに丘より松一株櫻一本生てあり誰も是を
此御陵跡とおもふりれと云ふなり是は非也

先地形白檮尾上と云ふ所より且上
代の御墓共を今見奉るありける事と云ふ全く
今もあり奉りておほろろなる高き大なる此
陵のみかき世よこのもの、畝火山東北に當り
いれと云き世よこのもの、畝火山東北に當り
下姑丘と云ふありてゆるる事と云ふ是
を定めしるありて
かくいひし事と古事記此事いふ事への傳へ
る事と云ふへのおぼろろに記したる事と云ふ多
くとも撰みし事と云ふ朝庭より定む
たありし書紀ありて其ありては和銅五年
五月に古事記を奉りし事と云ふ同一年に紀朝臣
清人等より詔ありて又書紀の撰り及これ日

本書紀ハ舍人親王と古事記撰にて奉りたる安
磨との撰りて養老四年に奉り八年後して
其初詔ありし歲月ハあきらかに諸の書
籍とて集めて志すたる多けれハ古事記を
奉りたるおさして後して詔ありにハあ
さけハ必古事記のみをよと定め給はんか
くはつらのうちよあしひきて撰ひかへさせ
給ふつき事ははよして書紀は續紀後記を撰
けさせ給ひたれハこそそ朝廷より専ら用ひ給ひ
し事ハあるハハ古事記と書紀と異ある事
あらんよ書紀ハよ撰りしといふたよハ代
々の天皇の心よそむくとやいふん然るとか
書紀をいひよふとそいふるぬとすのよあら

をりれ吉野へおそやれもあまて行向ひける道
すからに代々の奉行の例よて神武の御陵を拜
之奉りたる大和國よある所々の御陵皆大いよ
變りたる事はありとありし疑惑ハあれハ奉
行所ハよ記日記よと取出したるハ大和國御
陵の事元祿十年九月江戸より仰事ありて其年
之十一月より与力六人同心六人三手に別きて
所々へ行同十一年三月より御陵廻り竹垣あり
寶永八年四月に同心ハ頭壹人付添同心壹人よ
下改よ出るとしゆ扱大和國ハ御陵ことよ志
るハある内よ
神武帝 字塚山垣三十一間廻り除地奉行所ハ
五里半 未方申

植村出羽守知 高市郡四条村この知といふ事

皆々如斯志

綏靖帝 字スイセン 垣九十九間廻り小物場内

二升引 奉行所分道法六里 方角未申 神保備前守知

高市郡慈明寺村但し甚後安寧帝より末の事

奉行所よりおきての札を陵へおてよと

日坊陵之地廻り四十七間半之内雜人牛馬等

猥々入間敷候掃除無油断可申付依而年貢免

許之事子九月 日 裏に和州高市郡四条村 明 慈

如此寺村と同じ九十九間 其御陵はまうまは村々里人

とるも同一と許あり其内は御陵はる皆あり

神武陵ハ未だ一のかたさくを神武御陵の四

條より有るハ後世人の所ハにあり御

陵もかへりり高き御宣長か外の御陵とい

珠よもつうに三四尺さかきありといひ

はあやしきかきあり故より其姿を寫さ

る見ると未のころありあるかたあり前

乃塚山今もかき御振るこより西南二町より

下器をもて測るは畝傍山の頂かた山本村は田

中へ子ノ六アもあつるといふ

はうとよ凡貳尺はりの高さなる丘ありそ

れをミサンサイといひうてきたるは田成神

武田といふ神武御陵ありといふ

宮内省

へ知る 畏くも田子開きて高麗所の三残里
考るなるつ かく宣りて見きを古事記日本紀
おふひその公より定り給へるに露違ふ事なく
地のさるも又疑ふへからる里人か物語と神武
田壘きたるものいなりともなく子孫ちて死先て
今ハ跡なくありぬ又開き跡をいふ紫原尚阿
れとかいふことやおもふ草をいふもよほるん
御陵もニツの丘も木の枝を折てし必崇ありと
て里人らより多く恐るゝことあり予その事知聞
てそ教千歳に末よりいたりてかえりちまふ
事知れりことおもひぬさるは里人
るか物語にこれにてたかあるあかきとほふ
まかすけれといつきよといふへはふみと違

(六十一)

いぬ所よ御陵にありと詳ふも昔より定り
たる結請の御陵をいへて根よ御陵なるん
朝庭に御書きてを誣し恐るさるわきまから
や唐人の古への國の史といふものなとへ
漢に呂氏李唐の則天のことき歴代のうちにか
へは魏と蜀と此正統をいふるちと後乃世よ
論小事はあれとそはあたし世の事よ其
のまよふもいへんから人は古への帝王て小もの
とし日の本の可代もて皆朝庭のまよふも
いふこととくなる事ありんふ筆をわけてそのみ
かろし奉王のいふ事ありんふ筆をわけてそのみ
のまよひなる人か心をつゆも用ひらぬ事な
日本史といふは即今の朝庭に御史な
るを下して根よ論ふ宣長かひるちるにい
ふかふふふふふふふふふふふふふふふふ

宮内省

山陵精考

神武七十六年春三月甲午朔甲辰天皇崩于橿原

宮時年一百二十七歲明年秋九月乙卯朔丙寅葬

畝傍山東北陵延喜式大和國高市郡畝火山東北

烟古事記御年壹佰陸拾歲御陵在畝火山之北方白檮尾上也

高市郡四條村の東の田の中字塚山といふ神

武陵大和名所同繪といふあまと古事記畝火

山北のかかしの尾上とある尾上とい

ふ通いを又畝火山の東北三所はと字三

サンサイ組ミサンサイの其邊の田に神武田今又

といつまり塔の垣内あり呼所あり其所を神

武陵記といへ是も平地なり了尾上といふ

ふかふもこの山陵志多武峯記引て

山陵精考 神武七十六年春三月甲午朔甲辰天皇崩于橿原 宮時年一百二十七歲明年秋九月乙卯朔丙寅葬 畝傍山東北陵 延喜式大和國高市郡畝火山東北 烟古事記御年壹佰陸拾歲御陵 在畝火山之北方白檮尾上也 高市郡四條村の東の田の中 字塚山といふ 神武陵大和名所同繪 といふあまと古事記畝火山北の かのかしの尾上とある尾上といふ 通いを又畝火山の東北三所はと字三 サンサイ組ミサンサイの其邊の田に神武田今又 といつまり塔の垣内あり呼所あり其所を神 武陵記といへ是も平地なり了尾上といふ つかふもこの山陵志多武峯記引て

山陵精考

泰善法師といふ人天延二年三月十一日、
 の東北に行て一奇老人にありて老人かへりて
 とて泰善々々と呼しよや、まをければ宣ふや
 う朕か為に大衆法を講し國家の榮福を祈るへ
 し朕をこれ人皇のそめのおやふりて云畢
 下とて其後泰善法師毎年三月十一日こよ
 来りて法華を誦讀を貞元二年大和國光堂宇を
 いふて國源寺と号し則神武之廟塔其寺中に
 あるにあつる神武田塔垣内ありて少にあり
 不考ふれば國源寺の趾より神武帝の塔廟の有し
 所故みさ、記に比る名の残るありて
 いも付たるハ誠ニ通里山陵志に神武陵ハ畝
 火山東北の在り洞村の上よ呼て御陵山古事記
 傳ふハ

緋清陵といふ主體冢といふハ神武陵ありて
 といふ某か説か又玉かつらふハ大和國人足田
 村の如く付多ありて神武山といふハ其所を
 志の御陵山といふ所ありて大和志に今洞村
 墓といふ御陵山といふ所といふハ今洞村
 よゆきて尋るハ御陵山といふ地名あり人なり
 但し洞村の上に字丸山といふ古墳あり古
 御陵山といふ神功皇后又ハ太玉命といふ
 といふハ神武社を後世神功社といふハ神武
 天皇の社を祭禮九月十日也此日ハ神武
 天皇の社を祭禮九月十日也此日ハ神武
 記の東北とあるにかなひて古事記の白檮乃尾
 上とあるよしよくかなへて是則是なる事也
 緋清三十三年夏五月天皇不豫癸酉崩年八十四
 安寧天皇元年冬十月丙戌朔丙申葬於倭桃花島

田丘上陵 延喜式大和國栲能島田丘上陵非城東
肆拾伍歲御陵 下南北一丁守戸五烟古事記御年
在衛田岡也 畝傍山西北慈明村の上北岡の五
膳塚とよ小綏靖陵 大和志同圖會といふあきと
古事記傳の字主膳冢とよ小あるは法して綏靖
陵の之ある所其故の神武安寧懿徳天皇の御陵
畝火山の付あるの皆畝火山の其陵と記あるは
小姑綏靖陵しかたいさゆる主膳塚あるの殊
畝火山の付する尾を小の必畝火山某とあるは
きよ是は畝火山といふは衛田の丘とあるは
小彼山孤をさする地あることあきらけし空
海か益田池碑銘序の右鳥陵といへるは栲能島
田丘上陵といへるは益田池の西方近き所
ふあるの の二とくいはるは非あり

竹の 實の中 唐陵記の久米寺の成喜
云々 姑主膳塚の神八井目命を畝火山の北に葬
ると書記ある其御墓ある 今畝火山北の
膳冢と洞村にある字名山とよ小命の所墓あり
の上古の古墳あり 叔綏靖諸陵を尋るに鳥屋
村あり宣化陵の南の字籙子山とよ小上古の古
墳あり 畝火山の十所益田池の碑銘の上古に
陵製ふ適し栲能島といふ地名の銓も 宣化陵の
あきよ則是あること明し 宣化陵の
安寧三十八年冬十二月庚戌朔乙卯天皇崩年五
十七 懿徳天皇元年秋八月丙午朔葬畝傍山南御
陰井上陵 迎喜式大和國高市郡畝火山西南御陰
烟古事記 御年肆拾伍歲御陵高市郡吉田村東南
在畝火山之美富登也

戊戌朔丙午天皇崩秋九月甲子朔丙午葬于玉手
丘上陵延喜式大和國葛上郡玉手丘上陵非域東
前拾參歲御陵と有葛上郡室村と孝安陵御陵と
在玉手丘上也
いふありと孝安陵ハ玉手村と有了字宮山とよ
小傳大和志同國會古幸記上古の廟製より上よ
八幡の社あり坊玉手村の方そ正しかりへき
孝靈七十六年春二月丙午朔癸丑天皇崩孝元天
皇六年秋九月戊戌朔癸卯葬于片丘馬坂陵延喜
和國片岡馬坂陵非域東西五町南北五町守戸五
畑古幸記傳御年壹佰陸歲御陵在片岡馬坂上也
葛下郡王子門前村の西五町許馬ヶ脊坂の上よ
あり諸御陵考及字御廬所とよふこを帝陵の形な
し坊上の畑と峯ヶ垣内とよふ東吹丸山とよふ
梅ヶ峯ヶ垣内は山陵やうなるのまゝかある所

丸山は前の傳記出する所と三々て上古の陵製
よかたへ里但し峯ヶ垣内は畑よりなる時堀出
るる陵器の類を今坊廟所へうりるるあり
は城下郡黒田村法
梁寺の藪の内よ有
孝元五十七年秋九月壬申朔癸酉天皇崩開化天
皇五年春二月丁未朔壬子葬于劔池島上陵延喜
和國高市郡劔池島上陵非域東西二町南北一町
守戸五畑古幸記御年伍拾陸歲御陵在劔池中
也高市郡石川村の東よあり諸御陵皆同字中山塚
とよふ上古の陵製より上よ
いふありと開化六十年夏四月丙辰朔天皇崩冬十
月癸丑朔乙卯葬于春日率川坂本陵延喜
○延喜式大和國添上郡春日率川坂上陵非域東
西五段南北五段守戸十畑毎年差毛令守古幸記
在伊弉河坂上

あり御陵考及諸山陵志に陵の築方宮車と象に
下環に構へ溝法堀北天皇の御陵を始とて敏
達天皇の御陵をたふしといふれりは考へそ
らへし

崇神六十八年冬十二月戊申朔壬子崩時年百二
十歳明年秋八月甲辰朔甲寅葬于山邊道上陵
式大和國城上郡山邊上陵北城東西二町南
二町字戸一畑古事記即歲壹佰陸拾陸年山
邊上也城上郡洪谷村の東南あり今向山を
向山と志し山邊と向山の向の字形の相
似る山邊の古道今の神瀬街道の三四町
いかに山邊の古道斗東より有
かへし地勢古事記傳に山邊の道上の二
つ
いかに山邊の古道斗東より有
かへし地勢古事記傳に山邊の道上の二
つ
いかに山邊の古道斗東より有
かへし地勢古事記傳に山邊の道上の二
つ

り庶民記に今の東山邊俗よりあり山又王身
墓ありあるは谷村王の塚を崇神陵
同國會亭は谷村王の塚を崇神陵
垂仁九十九年秋七月戊午朔天皇崩纏向宮時年
百四十歳冬十一月癸卯朔壬子葬於菅原伏見陵
延喜式大和國添上郡菅原伏見東陵北城東西二
町南二町字戸三畑古事記傳歲一佰
伍拾陸年御陵在添下郡宝木村の東南あり
菅原之御野立也
字宝来山とよ小諸書皆同
景行六十年冬十一月乙酉朔辛卯天皇崩於高穴
穗官時年一十六歳成務天皇二年冬十一月癸酉
朔壬午葬於倭國之山邊道上陵延喜式大和國城
上郡山邊上陵北城東西二町南二町字戸一畑
御年一佰三十三歳御陵在山邊道上陵
上総村と字王墓とよふあり御陵考景行陵とあ
り共山邊郡の内より北の境より式の城上郡

とあるは違つるこは安康の古陵あるは山陵
志よ城上郡柳本村の東大和志よ柳本の東よ字
山辺の左の道は上よ御城山とよ古墳有別御
城山とよおは忍代別とり小御名の訛り景
行陵ありといつるいふく中せり

成務六十年夏六月乙卯天皇崩時年一百七歳明
年秋九月壬辰朔丁酉葬于倭國狹城盾列池陵喜迎
式大和國添下郡狹城盾列池後陵北城東西一町
南北三町守戸五畑古事池御歳玖拾伍歳御陵五
沙紀之多添下郡山陵村の東よあり字石塚とよ
他那美也弘仁二年十一月廿九
日西大寺領田地坪割は古繪圖今西大寺のふよ
り諸書乃論をある源

定政

多よたを記 大和國前傍山陵正誤辨

津國池田 源正宣謹述

夫より傍山を大和國高市郡北平原よ獨立して
乃北州の中央より北方よ峻嶺嶽々として南方
の峯上平垣あり是即神武天皇東征建都の靈蹤
とて崩御の後も亦其山乃良市よ葬り奉り
當時鴻荒開國の時より九重質朴より且
要害ふく了る有へり今も其山の形状偏
小成郭の如くありけり事地勢を觀て思ひ量
るに山頂よ畝火山口神社武あり
神武陵
日本書紀武神七十六年三月甲午朔甲辰十一天皇
崩于橿原宮明年九月乙卯朔丙寅十一葬畝傍山

東北陵○古事記神倭伊波礼毘古天皇御陵在畝
大之北方白栲尾上也○延喜諸陵式畝傍山東北
陵畝傍權京宮御宇神武天皇在大和國高市郡北
城東西臺所南北貳町宇五烟私按此陵元享官
檢行時里老の傳説と謬らきて山下より六七町
許東北四條村の東あり田圃中中墳墓を山
陵と定められたる

字塚山又福冢と云是を一説ハ神武皇子神
八井耳命の墓と云はれし書紀綏靖四年四月
神八井耳命薨即葬呼畝傍山北と然時ハ今慈
明寺村あり字主膳塚と管まりと云猶考ふを
し
まの山下より三町あり東北の田圃中神武

田一云みさやいへり郊原竹里松下氏廟陵記よ
いこい深山陵の廢址とせり
廟陵記右の如くありはいつの時斯荒廢せ
と云拠あり土人云古來此地耕作牧牛等と
あり時は忽ち崇あり仍て官より申て租税を許
され今ハ山草を刈て薪を云又今井村某
云近來驟夫有寡婦を爰に誘ひて媼を忽ち壁
下勤くことありて人より助りて家より歸り
尋て死ねり其靈威斯の如し
蒲生氏山陵志より今大久保村あり國原寺及
帝の廟祠を初より在り其彼處より遷せ由を
記せし是も亦里俗の話なり確據ありしを
推量しし有つたり今ハ其神罰とのこ

恐み恠しむる社

國原寺の天延のころ後春善法師創立せし由讚
峯妙樂寺の記に載とそ縁起創の奇怪を以て
取よ是ら也

然るも其帝陵は正しく山の東北なる半腹洞
村の後に字丸山と呼来るを觀也と云圓丘あり
一説に此地山本村の属と云云丸山はを
つて崑石多しと云此丘の形雀窠と云

王

この書紀の東北と云ひ古事記の白檮尾上と云
ふも符合しはし其側は神功皇后を齋する小祠
ありて毎歲九月十二日秋祭祀の日と云是即
神武帝を爰に葬り奉りし日は當れを蓋し神

功は神武の誤ある事顯然と云まゝの洞村を
檜村と云ふは古の字戸なる苗裔ありへき證と
をへし委の圖を觀て辨れ登きあり白檮尾上
の甜白檮熊白檮等記の例あり
檮の字書に剛本也と云

安寧陵

書紀に傍山南御陰井上陵○古事記御陵在畝火
山之御富臺也○式部傍山西南御陰井上陵云々
印本延喜式御陰と作るは活版の誤を傳へ
るに富臺は隱りたる處と云ふは故に陰の字
を充たさるる其地山の峽なる故と云ふ
るに
史徵 御陰井とあるは古語に疎きゆゑあり
うねり山の西南麓吉田村の西北より字阿祢山
と呼即御諱と傳ふる御陰井あり半腹より小祠と

建たり

北浦氏曰姑をこし東南より永安陵と呼び
小祠あり山陵の傍よりあり元享の官檢
こき武布陵とせり説如上文

懿徳陵

書紀畝傍山南織沙谿上陵○古事記御陵在畝火
山之真名子谷上也○式畝傍山南織沙溪上陵云
爾云山の東谷吉田村北東南字丸山と云所
本文云合王

又畝傍山北東麓^畦備村の側に懿徳陵と
る処あり其地平林より山陵よりあり元享
の官檢亦^は本陵と定めり

延喜六年日本紀竟宴得

神日本磐余彦天皇

三統宿禰理平

渡飛加氣留阿麻能伊波布

祢多都祢豆蘇阿岐都志麻

珥波美野波志迷勢留

とひかふる阿麻能伊波布
多川はたてを阿麻能伊波布
をみやそめせ給

人皇第一代
神武帝陵
改正圖



九山ノ所ニ小社在神功皇后之社
ト云傳フルハ神武社ノ訛傳成ヘシ
此社九月十二日祭日ナリ九月十日
ハ神武帝登遊ノ日也コラモテモ
器ヲ知ルヘシ左ノ考ヲ見テ知ルシ



おほよび大和河内等の諸陵はるるに似たりは
 はるか登りしを一號と二處を傳へ来りたふ
 ひきふかからるる中より太祖陵のまじ
 らるるまじ人の尋ねるるに圖をとり示を
 けりておのまかおもむきと斯きるる
 ものうらなほ博識にけり賀弊をなす
 南年

安政二年十一月

山川正宣

再

山川正宣 山陵考畧 安政二年秋 云延喜式 諸 畝傍山東北陵神

武天皇在大和國高市郡兆域東西一町南北二町
 守戸五烟 以下兆域各異同ありて且陵戸守戸等も有無
 多少一ふらむ故に今畧を但他を異とする所
 以て此は亦こき記志るを以てあり

畝火山を 神武帝開國建都の地なりて今其半
 腹良の方洞村の上の圓丘ありと云はるる山
 至て岩山なりと云ふは此丘傍に小祠有り 神功皇
 のニ崔嵬ありと云ふは例年九月二日ありと云ふ
 后と祭ると云ふ祭祀の例年九月二日ありと云ふ
 の崩即今日ありは 神功功久其を 神武と謬

今坊山は東北五六町所隔たる四葉村の家
 古事記既

永政云今島屋村の南ニ船付村と云所あり即身
 狭桃花島坂上宣化天皇の陵あり地の東南方不
 けそこ一陵あり側ニ祠廬もあり是綏靖天皇
 の陵なりありわか又船付村と云も元ハ桃花島
 村と云一を近辺ニ益田池あり事々々て後世
 船付と云名付たり此事赤松管彦もいへり
 此廻りに池あり

定政云宣化陵ハ南ニ字罐子山と云古墳あり
 こを上古の陵制と叶ハ桃花島と云地名ハ証山
 志宣化陵ノ条ニ多屋村ハ桃花島ノ字ハ桃
 レル名又島屋村ノ内船付とお云ハ船付ハ桃
 花島ト云名ニ船ノ語ノもあはる綏靖陵ハこ
 と明云と云ハ山ノ北總明寺村ノ地ニ字主
 靖ト音近キノミニテ地名ニ叶ハスハ書紀ト
 神八井耳奈ヲ訓旁山ノ北ニ華ルトアルニ能
 ア

正宣云式花島田丘上陵綏靖天皇大和國高市郡
 下畷之字ハ火山の南久米寺ハ側ニ島田岡と
 いへり又字罐子山島屋村船付村等も皆此辺ニ
 桃花島田の訓都幾太船屋名と斯傳へり
 とも

今山の北麓慈明寺村ハ主膳冢既ニ帝陵と云る
 ハ綏靖と主膳の音相似たり故もや次下ハ二陵
 船付山云ると有ハ此陵のニ然らむと云ふ
 古事記ハ見へりハ此陵ハ神武天皇ノ御陵
 綏靖法と誤リ奉りてハ或云ハ神武天皇ノ御陵
 保長と云主膳と云ハ故ハ又神武天皇ノ御陵
 と云ハハ池尻と云ハ

大味國高市郡吉田村の西北
畝傍山西南御陰井上陵
安寧天皇
秀明云日本紀御陰作御陰和訓美富登或曰久米
寺西南或人云吉田村ノ東南マナゴ山ノ中ニ
リ字安寧山ト云畝傍山ノ西南ニ當ル小宮アリ
御陰井ハ知レズ
永云在吉田村御陰井西北ノ丘祠廬在井東南
宣長云北御陵吉田村ト云ルあり畝傍山の西南
ノ方の麓より着き高き國より書紀に畝傍山
式に依り南上ノ西字を彼慈明寺村の南あり御
陵と全同ト云ふなり御陰井ハ吉田ノ里中の路
ありて西北方より一断あり
秀實云御陰井上陵是以井上為陵所在然井

大味國高市郡吉田村の西北
畝傍山西南御陰井上陵
安寧天皇
秀明云日本紀御陰作御陰和訓美富登或曰久米
寺西南或人云吉田村ノ東南マナゴ山ノ中ニ
リ字安寧山ト云畝傍山ノ西南ニ當ル小宮アリ
御陰井ハ知レズ
永云在吉田村御陰井西北ノ丘祠廬在井東南
宣長云北御陵吉田村ト云ルあり畝傍山の西南
ノ方の麓より着き高き國より書紀に畝傍山
式に依り南上ノ西字を彼慈明寺村の南あり御
陵と全同ト云ふなり御陰井ハ吉田ノ里中の路
ありて西北方より一断あり
秀實云御陰井上陵是以井上為陵所在然井

之得名蓋因陵故為御蔭今此陵呼曰阿祢山即安
寧所訛其地吉田村永政云土人あね山といふ安
寧を訛りたるあるべし 祠廟ハ畝火山の西の麓
よりあり又御陰井ハ村内よりあり小き井あり信し
難きもの也小さくとも池ありこそあるべし
こけハ大かき早く埋れりりものあるん陵の廻
りハ池あり

定政云畝火山の西南吉田村の西北よりあり字あ
ね山とよふ小安寧ハ訛ハ御名上ハ安寧社あり上
古の陵制ハ叶ハる ▲吉田村ノ東南ニモ安寧陵ト
云アリテ上ニ社アリソハ山陵ノ
形ナ

正宣曰式畝倍山西南御蔭井上陵安寧天皇在
大和國高市郡 蔭宜 作陰

山の西麓と字安祢山との峽ハ在吉田村の西北
より安祢ハ即御謚より古事記ハ畝火山の美
富登とミゆ按る富登ハもと女陰の稱より陰の
字より填て記紀等ハ往々此名義見たり半腹
より小祠在り御陰井ハ今山下よりあり 亘四尺計清
井ハ此地の形勢ハ之ハ名をけりる上古の質
朴見るハたハる 式御蔭井ハ初活板の語アリ
今吉田村の東南に 帝陵と云処あり山陵の形
たよりありは素地名よりハ合ぬとや

山ノ西麓、宮内省山林山ノ北、在吉田村ノ北也。北
山ノ西麓、宮内省山林山ノ北、在吉田村ノ北也。北
山ノ西麓、宮内省山林山ノ北、在吉田村ノ北也。北
山ノ西麓、宮内省山林山ノ北、在吉田村ノ北也。北
山ノ西麓、宮内省山林山ノ北、在吉田村ノ北也。北
山ノ西麓、宮内省山林山ノ北、在吉田村ノ北也。北
山ノ西麓、宮内省山林山ノ北、在吉田村ノ北也。北
山ノ西麓、宮内省山林山ノ北、在吉田村ノ北也。北
山ノ西麓、宮内省山林山ノ北、在吉田村ノ北也。北
山ノ西麓、宮内省山林山ノ北、在吉田村ノ北也。北

(六十二)

吉田村ノ東南、山ノ東麓、在吉田村ノ北也。北

畝傍山南、織沙溪上、陵。懿德天皇

秀明云、織沙溪、真名子谷和訓近也。或曰、久米寺、東

南、或人云、畝傍村ニアリ、畝傍山ノ東ニ當ル小宮アリ

織沙谷ハ知レズ同書異本云マサゴ山ノ上ニアリ

永云、在畦植村、西織沙溪、祠、在村東北、陵、西有荒

陵、属池尻村、傳ヘ云、皇后陵

宣云、此御陵ハ畦植村ノ西方吉田村ヘ越ル路

ノ少シ南方ニあり、即畝火山ノ南ノ谷ノ内ニあり

見、原氏カ畝火山ノ巽方ニ小谷、陵あり、懿德天皇

ノ御陵アリ、其頃地ノ真名子谷ノ真名と云ル者

又、或説、久米寺ノ東南ニあり、云ハ甚ク覺

ガハ

宣 菅笠 云うねむ村を西へとわら山は南の尾を
こえてくくくあり吉田村あり此あり
此道の左より南ふじ山ありこの地ふじい山名今
もあまの池を水あせてそのかゝるはこ残きり
そかたつとく天皇の御陵のそのまゝありるべ
きと云くくくくくくくくくくくくくくくく
秀云今呼織沙山以織沙布露溪間也其地畝旁村
安寧及此陵並有祠在陵上凡陵地建祠奉祀往々
有之未審其昉於何世也
政云畝火村の西にあり小き陵あり祠廟は村の
東北よりあり即畝火山の東南の麓なり陵は廻り
り池あり
定公吉田村の東南南ふじ山の東は谷あり字

丸山とよし上古の陵制と叶む畝火山の南あり
こ谷とある地名よしよく叶つる ▲畝火山ノ東
アリテ上ニ社アリハ山陵ノ形ナシ又畝火山
ノ南マナコ谷トアル地名モカナハズ
正宣云式畝傍山南織沙溪上陵懿徳天皇在大和
國高市郡山の南麓吉田村より南ふじ山の谷
に在 古事記 眞字丸山と呼へり
今畦植村乃東道路隔たる東林より小祠在処
をハ帝陵と云其地平林より山陵と云へり形
たにありは地名よし叶はさるる也

諸陵式云々
 大和志云々
 古川宇信
 信
 宮
 山ハ知レズハ堂ト云小山アリ博多ヲ訛歟
 永云在室村陵畔有八幡祠并冢四
 宣云書紀孝安卷三十八年秋八月丙子朔己丑葬
 觀松彦香殖稻天皇干掖上博多山上陵とある三
 十八年心得如事なり
 旧事記云八十三
 年天皇崩
 依云から三十八年
 疑下明年と云
 記せる事なり
 大和志云々
 古川宇信
 信
 宮

掖上博多山上陵

孝昭天皇

明云葛城山東諸山多掖上博多山不知何山蓋御

所^{或云}迎^{室村云三}

或云三室村ニアリ字天皇山ト云小宮アリ博多

山ハ知レズハ堂ト云小山アリ博多ヲ訛歟

永云在室村陵畔有八幡祠并冢四

宣云書紀孝安卷三十八年秋八月丙子朔己丑葬

觀松彦香殖稻天皇干掖上博多山上陵とある三

十八年心得如事なり

旧事記云八十三

年天皇崩

依云から三十八年

疑下明年と云

記せる事なり

大和志云々

古川宇信

信
宮

皆其意なり也。今俗云ふ上は其地非
す。其古の御陵と云ふは、今在るを見ても其地の形
思ひ出さるるに、其思ふ人のあやむべき故也。
秀公在掖上博多山、神武帝三十八年巡中國、登掖
上、嗟間山今呼國、孝昭帝都掖上、居於池心宮、今池
内村、即其趾在、嗟間山西北。又博多山在池内西北
並蒙之以掖上、是此間總名、可知矣。博多山、今
呼天皇山上、有祠奉孝昭之祀、其地三室村、池内村
一室村、室是孝安帝秋津嶋宮、所今有古墳、焉石塔、
一片暴露於其上、里老相傳、亦孝昭陵、夫孝昭之
葬、在孝安之三十六年、意不應替、延至此、更掘、
紀書、元年八月、葬之、則孝安、孝思之深、蓋初、近葬、其
所居、室地、朝夕、觀望之、及晚年、卜地、改葬、博多、矣、且
其曰、三室、或仍、陵、旧号、三本、為御者、尊之、之稱、
政云、三室村の山上、あり天王山、又博多山、と
いふ、陵上、の祠、唐あり、拜所、なり、とあり、て、宜き、陵
なり、額、の、孝昭宮、とあり、高泉、筆、なり、陵の、廻、りに

池

定云三室村よりあり、上は孝昭天皇社あり、近地
ニワキ田ハ名山等ノ名残レ

正宣云式上博多山上、陵、孝昭天皇在大和國葛上郡
三室村の北字天皇山ト云、御所村ハ南より、陵上
より小祠在、其傍よりあり、ト云山畑あり、蓋はかた
此訛なり、又、其田と云字も有、掖上の轉語なる

玉手丘上陵

孝安天皇

明云玉手丘玉手村是也在室村西北川東

或云室村公儀小物成山ニアリ同書異本云玉手村内玉手山ニアリ

山ト云

永云玉手村陵南有天神祠小冢ニ在邑中

宣云書紀孝靈卷ノ百二年春正月日本足彥國押

人天皇崩秋九月甲午朔丙午葬于玉手丘上陵ト

見之諸陵式云々トア皇今も玉手村あり即

御陵も坊地トア皇前王廟陵記ト云々ト云大和

志ト云々ト云リ

秀云在孝昭陵東玉手丘蓋坊間亦當隸掖上而諸

陵式不冠之畧言今今陵所_在曰宮山其上有祠_手

丘東南有冢呼為罐子山取名其形也然檢之實
 是宮車象而左有靈元二月冢蓋所陪葬者人或以
 為孝安陵非也孝安陵者孝安縣獨
 先得如孝安陵也孝安陵者孝安縣獨
 及正之喪玉由朝使於路而匿於武內之宮域
 已而懼罪殺由朝使於路而匿於武內之宮域
 玉墳而其孫宿禰之所匿處亦可以備考矣
 智西南之地自此其南可指芳野山
 福云玉手村あり字天王山
 政云陵前に祠廟あり字宮山といふ又小冢二つ
 村中あり陵は廻り池なり
 定云玉手村あり字宮山といふ側は八幡社あり
 玉手村あり字宮山といふ側は八幡社あり
 正宣云式玉手丘上陵孝安天皇在大和國葛上郡
 宮村の北に字宮山と呼り傍に祠あり東に
 玉手村あり字宮山といふ側は八幡社あり

又玉手村乃南より宮山と云大冢ありて帝陵不
 可といへと形状時制と違つて相原村に属す云
 と考ふ

丘東南有四冢呼為罐子山取名其形也然檢之實
 是宮車象而左有石二三月冢蓋所陪葬者人或以
 為孝安陵非也孝安陵在玉手村西一里許其地
 先得如孝安陵之玉手村一里許其地
 及而懼之非玉手村一里許其地
 已而懼之非玉手村一里許其地
 玉手村一里許其地
 丘墳而其源宿祢之觀之所置處亦可以備考矣
 智西南之地自此其南可指芳野山
 福云玉手村あり玉手字天王山
 政云陵前に祠廟あり字宮山といふ又小冢二つ
 村中よりあり陵は廻り池なり
 定云玉手村あり玉手字宮山といふ側より八幡社あり
 玉手村あり玉手字宮山といふ側より八幡社あり
 正宣云式玉手丘上陵孝安天皇在大和國葛上郡
 室村の北より字宮山と呼り玉手村あり東より
 玉手村あり玉手字宮山といふ側より八幡社あり

又玉手村乃南より宮山と云大家ありて帝陵不
 可といへと形状時制と違つて相原村より属す
 と考ふ

葛下郡

片丘馬坂陵 孝靈天皇

明云或曰片丘馬坂今馬賴坂是也片丘在奈良

西南五里餘

或云王子村ニアリ字嶺^{ミナ}垣内山ト云

永云在王寺村馬脊坂東山中陵畔有家二

宣云書紀孝元卷ニ六年秋九月戊戌朔癸卯葬大日

本根子彥大瓊天皇于片丘馬坂陵諸陵式ニ云

と河前王厩陵記ニ云と云大和志ニ云と云

秀云在傍丘馬坂傍丘是旧都西南而其西並葛城山

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

延地乎南者里所因号傍丘焉馬坂其西北而葛城之麓也按大和西偏古葛城國也後世分為二郡曰葛上葛下葛下即傍丘西地所謂片岡莊也片岡葦田也又片岡氏之墟並在下牧片岡即傍丘則其墟与池所在牧地果是傍丘也馬坂今之馬賴坂在達磨寺西獨其地西山是麓而与傍丘隔離教町因知傍丘非西山而其名之蒙此間或指西山曰傍丘謬也考靈帝孝元之六年葬于此耶然則其故陵何在也黑田孝靈所都其地陵墓之類累々有在亦可備考長山六五五本史政云王子村西方三町斗山上あり字峯垣内と云ま馬脊坂と云陵のめぐりふ池あり

定云王寺門前村の西馬の瀬坂の上あり字御廟所

コハ帝陵ノ形ナケレハ里ハニサクリ同フニ此上ノ畑字峰ノ垣内ト呼所ニ昔御廟所ハアリケンヨレ傳ヘトリトイヘリサレハ峯ノ垣内ヲ畑トナス時堀出シタル陵器ノ類ヲ今ノ御廟所ニ移シ埋タルカ

正宣云式片馬坂上陵孝灵天皇在大和國葛下郡王寺村に属す馬賴坂の東字峰の垣内又御廟所と云殆荒廢に属せり陵頂も畑有て半腹に聊其形を殘すのし可嘆後世所創片岡山の麓達磨寺の側なり

宮内省

宮内省
皇極經世一書紀應神卷十一年冬十月作劔池
難波池中有靈劔
或云石川村アリ字中山冢ト云劔カ淵ノ辺ナ
リ
永云在石河村劔池南俗呼中山冢陵畔圓丘六
宣云劔池ハ書紀應神卷十一年冬十月作劔池
とあり了古事記云し同御世に此舒明紀云七年
秋七月瑞蓮生於劔池一莖二花皇極卷三年御佩
於劔池蓮中有一莖二萼者云々万葉十三御佩
乎劔池之蓮葉ありとみゆ御陵ハ書紀開化卷二
五年春三月丁未朔壬子葬大日本根子彦國牽天

劔池鳥上陵 孝元天皇

明云古事記曰劔池之中岡上或曰劔池在高市郡

難波池中有靈劔

或云石川村アリ字中山冢ト云劔カ淵ノ辺ナ

リ

永云在石河村劔池南俗呼中山冢陵畔圓丘六

宣云劔池ハ書紀應神卷十一年冬十月作劔池

宮内省

皇于劔池嶋上陵今思ふは此池は應神御世より出
諸陵式よ云々とあり大和志よ云々と云皇前
廂記よ或曰云々と云得難此池石川村の東よ
波も有靈劔と云るも心得る西の徑四町ありと
有て今も大なる池あり池の西の堤の下のりて
石川村 御陵の山は南方より池の中へ衝出てあり
とに島と云つづきさやうして七町半余あり
池は其東北の方より西南の方より廣く周り
應神天皇の御代は此池を作らるるなり
秀云劔池是身狭之東應神帝十一年十月作劔池
然則穿此池後於築陵而陵号乃取於池池名曰劔
未知其故也古事記作劔池中岡今呼其池曰劔淵
陵曰中山塚
政云劔池の南方よりあり此池大なりて陵を池よ

添てあり字中山と云
定云石川村の東劔の池の中山よりあり
正宣云式劔池嶋上陵孝元天皇在大和國高市郡
久米寺の東石川村の東南あり岡の前より在り池
は西北のりを遠きなり古事記劔中岡字中山塚又劔淵
と云按此池は應神帝御時よりありて陵号は
後より所伝多し信家
按以上山陵之丘境を就て葬り奉る所
あり別と築造せり又信家も或は有
武は堂造し武は池を造るなり又信家も或は有
別は堂造し武は池を造るなり又信家も或は有
あり但多し武は池を造るなり又信家も或は有
あり蓋は侍の男女の死後其傍に葬り
葬り蓋は侍の男女の死後其傍に葬り

春日率川坂上陵 關代天皇
明云或曰今在奈良林小路韓國社與念佛寺境内
或云奈良油坂村念佛寺境内ニアリ字坂ノ上山
ト云
永云在南都林小路町
宣云書紀云六十年冬十月癸丑朔乙卯葬于春日
率川坂本陵一云坂上陵とあり諸陵式云々北
域東西五段南北五段以在京戸十烟毎年差充令
守と見ゆ坂本といひ坂上と云ニの傳のうら式より
平城京内あり前王廟陵記云或曰云々と云々念佛
寺の後方あり今此ありの坊名は油坂町
坂之新屋町西坂と云あり坂上と云は由あり
秀云今奈良念佛寺地有古墳焉此也率川其源

春日率川坂上陵 關代天皇
明云或曰今在奈良林小路韓國社與念佛寺境内
或云奈良油坂村念佛寺境内ニアリ字坂ノ上山
ト云
永云在南都林小路町
宣云書紀云六十年冬十月癸丑朔乙卯葬于春日
率川坂本陵一云坂上陵とあり諸陵式云々北
域東西五段南北五段以在京戸十烟毎年差充令
守と見ゆ坂本といひ坂上と云ニの傳のうら式より
平城京内あり前王廟陵記云或曰云々と云々念佛
寺の後方あり今此ありの坊名は油坂町
坂之新屋町西坂と云あり坂上と云は由あり
秀云今奈良念佛寺地有古墳焉此也率川其源

發春日山經坊南而西、北城方面總五段昔時蓋以
郊于京邑逼於市廛而致如此之狹也
政云奈良の林小路念佛寺の域内よりあり少き陵
あり今ハ坊寺の墓所とありたる廻りは竹林と
丁池の形聊残きと

定云奈良林小路町念佛寺のあり

正宣云式春日率川坂上陵開化天皇在大和國添
上郡北城東西五段南北以在京戸十烟毎年差充
令守是を平城宮以後の

今奈良市中林小路と油坂領の界念佛寺の後より
在り陵地の油坂より属率川の今四所按よ延
喜の時高既よその狹隘ある事式の如し况今世
の為体垣中僅よ南北四間東北三間よ過を

其外ハ念佛寺の墓地なりハも士鹿の塔碑累々た
り嘆息ハ猶孝靈陵よ勝り環池の跡ハ寺外

身狹桃花島坂上陵

宣化天皇

明云身狹地名或作牟佐或作武遮音訓通身狹桃

花島坂上陵今其處雖不明在益田池西南可以性

靈集并之或云鳥屋村益田池碑銘序曰武遮荒壘下其

坤

或云鳥屋村ニアリ字ニサンサト云陵ハ公

儀ノ物成山ニアリ

永云在鳥屋村西南東有小陵俗呼俱知山以皇后

橘皇女及其孀子合葬于此周廻有池廣三百三十

畝域外有小冢五

宣云身狹正書紀欽明卷ニ遺蘇我大臣稻日宿禰

等於倭國高市郡置韓人大身狹屯倉天武卷ニ牟

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

狹社神名帳高市郡牟佐坐神社今世
瀬と云々三瀬即牟佐境原天神と云社
し牟佐坐神古今三瀬のあたりに
ありと云り内なりしを
傳し身狹の内にありしを
書紀神武卷に築坂邑とあり也
倭彦命子身狹桃花鳥坂ともあり大和志に身狹
桃花鳥坂上陵云々と云り前皇廟記に云々或
云鳥屋村よりあり御陵の廻り云鳥屋村と云り或人
今思ふに西の御陵の上の道に鳥坂ありと云り
鳥坂と云同地地皇の御陵の廻りに鳥坂ありと云り
合意の御陵の地皇の御陵の廻りに鳥坂ありと云り
己かたの御陵の地皇の御陵の廻りに鳥坂ありと云り
云かたの御陵の地皇の御陵の廻りに鳥坂ありと云り
秀云桃花鳥乃取帝南地凡地謂之身狹謂高地曰高
身之類是也蓋對天身狹之地因其介丘壑甚狹隘
則地是形魄

而名之狹乃分在南北為大身狹小身狹欽明帝十
濟人於大身狹屯倉高麗人於北者比之南頗廣所
謂大身狹此也其地相接桃花鳥坂故号曰身狹桃
花鳥坂上陵凡兩地之交不可偏舉必号之以兩地
孝德帝陵号大坂益田池碑云在龍寺謂龍蓋寺也
磯長陵亦然益田池碑云在龍寺世稱岡寺者
是右鳥陵鳥陵即桃花鳥坂上陵而有其語也集注
鳥陵為白鳥陵按史云在琴引原陵地今為
蓋今原谷村地也
鳥谷村自此東南即益田池故地故云右之也身狹
之訛為三瀬三瀬村乃在其東又其東石川村有劔
池焉
政云鳥屋村より何里巡りし池あり大陵あり池乃
側より小塚三つあり五つあり一城近き年二つ崩
なり其人卒に狂氣して死せりと土人の小

別大和志より小冢五つとあり

定云鳥屋村の西南よりあり字みささ、はとよ、小宣

カキノ南ニ字升カ山トヨ古墳アリ今半コボイ
桃花坂ニ華ルトアル形残レリコハ倭彦命ヲ身狭

正宣云式身狭花鳥阪上陵宣化天皇在大和國高

市郡總靖陵の北鳥屋村の西より在字みささ、以久

寺よ近書紀より皇后合葬と見ゆはと別ある事

安閑陵も同志

鳥屋村と越智村の間より陵地有て字升山と

倭彦命の身狭花鳥阪墓

鳥屋村と越智村の間より陵地有て字升山と
倭彦命の身狭花鳥阪墓
と云にあらはれり



